

---

# 15歳の妊娠ホームレス

シー様

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

15歳の妊娠ホームレス

### 【Nコード】

N9143J

### 【作者名】

シー様

### 【あらすじ】

数年前、「15歳の妊娠ホームレス」という見出しでニュースが放送されてました。

その話に出てきた少女をモデルにして心の中を妄想で書いてみました。

(前書き)

数年前、「15歳の妊娠ホームレス」という見出しでニュースが放送されてました。

その話に出てきた少女をモデルにして心の中を妄想で書いてみました。

妄想なので色々、矛盾点はあると思いますが、ご了承ください。

というより、矛盾点があったら教えてください。

作者自身も何が矛盾なのか、実は判らなくてモヤモヤっとしているので……

私はホームレス。 15歳。

「この子を産みたい」

そう思えるようになるまでに、私は沢山のものを失った。けれど、産みたいと決断した時、私はこの世界の愛を知った。

未熟だった私が、どうしてホームレスになっていたのか・・・私の話を聞いてください。

そして・・・私と同じような悩みを抱える人が居たら、どうか助けてあげて下さい。

・  
・  
・

私には、父親が居なかった。

生まれる前に、事故で死んでしまつて、母親一つで私は育てられた。父親が居なくても、何不自由無く育ててくれた。

私は、そんな凄い母が大好きだった・・・

私が小学生になりたての頃、母に好きな人ができて再婚した。私にもお父さんができた。

母の幸せそうな笑顔を見ると夫婦とはいいいもんだなと思った。

けれど私は、母が今までの人生を苦労していたとは想像さえしなかった。

母は、自分の弱みを一切見せる人ではなかったからだ。

完璧な女性で、私は尊敬していた。  
子供ながらに母のように強く、いい女なりたいと思っていた。

でも母が完璧過ぎたのがいけなかったのかもしれない。

母は再婚する前は度々、死んだ父の自慢話をしていた。

私は、男の人の悪い部分を一切知らずに育てられた様なもので、男に対する恐れなど知らなかった。

少女漫画のような王子様が存在すると信じていたくらいだ。

中学2年になり、私には好きな人ができた。

私は、彼のが、好きで、たまらなかった。

漠然と将来の結婚も期待していた。

今の両親みたいな幸せな日々を夢見た。

そんなある日、母は、死んだ。

母の死は、とても辛いものだった・・・

いつも完璧で気丈に振舞っていた母が泣いたのだ。

泣きながら母は私に幸せになることを願いつけて死んだ。

不幸は続いた。

父は会社をリストラされそのショックから働かなくなった。

そんなある日、私は妊娠していることに気付いた。

当時の私は避妊というものを勘違いしていた。

エッチな漫画やDVDの影響を受けていて、中出しさえしなければ、子供なんて出来ないと思っていた。

彼も、同じ様に思っていたと思う・・・

過ちと言われても仕方が無いのは判っていた。

けれど将来、彼と一緒にいることを望んでいたから、遅かれ早かれ、彼の子供は欲しかった。

私は少し楽天的に考えていたのかもしれない・・・

子供が出来たと知った父は、産むのを猛反対した。将来の心配していた。

確かに私も産むのは怖かったし、できたら逃げたかった。

でも、なにより好きな人との子供だったし、

彼なら父を説得してくれると信じていた。

でも彼は・・・

「お願いだ！ 下ろしてくれないか？」

こんな冷めた口調ではなかったかもしれないが、私には彼の言い訳が、このように聞こえた。

彼は、私との将来を真剣には考えてくれていなかった。

訳がわからなかった。

好きだからHしたんじゃないかったの？

好きなら、私の子供を受け入れるものじゃないの？

そう信じていたから何かの間違いじゃないかと思ひ彼にすぎた。

だけど、そのことが原因で次第に、私たちの関係は周囲に広まり、お互いそれぞれの居場所をなくしていった。

彼は、学内では優秀な生徒であり生徒会長をしていて評判が高かった。

彼の将来の夢は、エリート大学に進み官僚になることだった。その為には、良い高校に入学しなければならない。

高校受験に向けて忙しい時期だったし、彼は、その夢に対して労力を惜しまなかった。

彼の頑張りは、私も知っていたから応援していた。

けれど、私が彼に、すぐることで今回の事件が世間に広まった……

彼の世間的なイメージは悪くなり陰口を叩かれ。

心理的に彼は追い込まれていった……

元々、家族思いの人で出世して親孝行を望むような人だった。

だから、自分のした過ちに対して、親に顔向けが出来なかったのだ。ストレスから、成績が次第に落ち続けて、志望校の望みはたたれ、彼は壊れていった。

家に引きこるようになり誰とも会話をしなくなっていた。

私は壊れていく彼に対して申し訳無い気持ちでいた。

確かに最初は……私を捨てる彼を恨んでいたかもしれない、  
だけど私も同じように、周囲から馬鹿扱いされて孤立していたから、  
彼の気持ち痛みほど判かった。

私の彼に対する恋という熱は冷めていた。  
あるのは情だけであった。

私は彼のことは抜きにして自分がどうしたいのか考えた。

私は産みたかった。

父親が居なくても、母のように強く立派に育てたいと思った。

だけど、父は反対した。

「どうして好きでも無い男の子供を産むんだ！ そんな子供を愛せるのか？」

私は、はっきりと愛せるとは言えなかった。

単に、子供を下ろすという罪悪感から逃げたかっただけかもしれないからだ。

このまま下ろした方が、父に苦勞かけなくて済むのだ。

周りが言うように、私が産みたいと思うのは、間違っていることなんだ。

いつしか私は、そう思うようになっていた、

流されるまま、中絶の手続きが進んでいた。

私自身、考え過ぎて疲れ果ててしまい、もう、どうしても良くなっていたのかもしれない。。

ただ中絶手術の当日、私は、病院で元気な赤ちゃんと、幸せそうなお母さんを見た時、体が、勝手にここから、逃げ出していた。

家に帰ると、父に激怒された。  
こんなことは、初めてだった。

父は言った。

「家には子供を育てる余裕はないんだ！！　しのごの言わずに下ろして来い！！」

私は、この父の言葉に大きな疑問が引っかかり、つい

「いくらリストラされた事ショックでも、まったく働こうとしないじゃない！　父さんは人としてどうかと思うよ！」

私は地雷を踏んでしまった。

「誰が、好き好んでお前の様な親不孝者を育てないといけんのかあ！！　ふざけんじゃない！」

そう言うとお父さんは、私を殴った。

酒の勢いもあったのかもしれない。

だからこそ、私は耐えた。

だけど、その晩、お父さんは、私を無理やり犯そうとしてきた。

「今まで耐えたことに対する、俺への褒美だ。神様だって許してくれる！」

私の知っているお父さんはどこにもいなかった。

私は逃げた。とにかく逃げた。

どこにも行くあてがなく走り続けた。

気付くと私は、公園に居た。

私は、人目を忍んで公園で寝泊りした。

自分が周りから認められるはずはないと思った。

自分のどっちがすがすが、気に入らなかつた。

子供をどうするか決断できない自分に腹がたつた。

自分が情けなくて弱くて、誰からも嫌われていると思った。

このまま、ここで、この子は流産してしまうのだろうか。

私は、どうなってしまうのか、餓死してしまうのだろうか。

誰も味方は居ない・・・

一人は寂しい・・・お母さん助けて・・・

私は、公園の土管の中で、一人で泣いていた。

そんな時、一人のホームレスの叔父さんが声を掛けてくれた。

ホームレスの叔父さんは、何も聞かないで、私に食べ物を分けてくれた。

嬉しくて涙が止まらなかった。  
ありがとう。

私は、ホームレスに対して、それまでは大きな偏見があった。

父のように働かずにゲーたらしている人たちだと思っていた。

けど、違った。

私は、社会の底辺と呼ばれるこの場所が、オアシスに見えた。

私は、このオアシスになら、子供を産み落としても後悔しないと思  
った。

私は、前向きに子供のことを考えられるようになっていた。

私は、子供を産むための資金を本格的に稼ごうと仕事を探し始めた。

バイトの面接時に、福祉についてのシステムを教えてもらった。

私は、この時、はじめて福祉のシステムを知ったのである

もし、あの時、ホームレスの叔父さんに出会って居なかったら・・・

私は、今頃、どうなっていたのだろうか・・・

ホームレスの叔父さんに感謝しなくちゃいけない  
ありがとう

福祉の皆さんにも感謝しなくちゃいけない  
ありがとう

子供と2人で、いつか、皆さんに恩を返したいと思います。

(後書き)

この主人公となったモデルの少女は、実在していて大々的にニュースになった事がありました。

テレビの中の少女は悲惨な人ではなく、むしろ、とてもたくましく、堂々とテレビに映っていました。

少女は自分のことを詳しくは語りませんが、私は気になって仕方ありませんでした。

正直、少女がどんな心理状態で、どういう人生を歩いてきたのか、私には判りません。

ホームレスになるということは、何も助け舟がなかったということですから、

彼は助けてくれないという状態です。。。「好きでも無い男の子供を産む」という

考えにいたると、少女が産みたいと思う理由が理解できませんでした。

女の人には母性本能があって単純に産みたいと思うのかもしれない。。。。  
けれど男の私からしてみれば、母性本能という答えだけでは納得できませんでした。

いろいろ突き詰めていくうちに、ホームレスが少女に決断させるキツカケになりえるような気がして書いてみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9143j/>

---

15歳の妊娠ホームレス

2010年10月14日12時01分発行